



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、
方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学講師、日本語教師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員

著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）

「おもしろ えちご塾」（恒文社）

「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」

（人間の科学新社・共著）

「明治大学政経論議 2016年度（新潟美人）」（明治大学政治経済研究所）等

「かんじはいし」

みなさん、かんじはとくいですか？あつ、わたくしですか？「ああよのなかに たえてかんじのなかりせば」とおもうこともむかしありました。しかし、かんじなければよみにくいあったらありゃしない。みなさんも、ここまでよむのはたいへんだったとおもいます。なかにはよっぱらになってこれをほうりなげたひともいるでしょう。ようじのえほんじゃあるまいし、ひらがなばかりのぶんはよみにくいのであります（ということで、次から読みやすくなります。ご安心を）。

当タイトル「かんじはいし」も、ひらがな表記では「幹事廃止」なのか「幹事は医師」なのか、「漢字廃止」なのか「漢字は石」なのか首をひねります。漢字があればこそ、一目瞭然・意味明解というものです。しかし、しかしであります。かつて日本で、「めんどくっせいで漢字やめましょて」と「漢字廃止」の動きがあったことがありました。

「漢字は読み書きが困難である。国民老若男女あまねく学問を広めるためには面倒な漢字は廃止！誰でも読める・書けるようひらがなを国字とすべし！」という趣旨で『漢字御廃止之議』を建議書として、畏れながらも十五代将軍徳川慶喜さまにご提出された御仁がいらっしゃいました。

時は慶応2（1866）年12月、その名もわが新潟（旧高田）が生んだ郵便の父で名高い「前島密」先生でありました。この密先生、幼名「房五郎」8歳の時、糸魚川の親戚筋で医師の家に養子入り。かの地で蘭学・蘭語（オランダ語）を学ぶはずが、大きな声で言えませんが、何かと思うようにいかなかったらしく、泣く泣く（多分）高田に舞い戻り、漢学の塾で学びました。10歳のことでした。その2年後、江戸に出て、31歳で前島家を継いで「密」に改名し

た先生は上記の『漢字廃止論』を建議。その後明治2（1869）年には新政府にも進言し、密先生はとうとう、すべてひらがな、漢字表記なしの『まいにちひらがなしんぶん』を発行したというから、その実行力と国をも動かすほどの影響力には恐れ入ります。

とはいえ、分かち書きにしても、ひらがなだけの文章、しかも新聞の性質上、文字数の多い文章は読みにくいあったらありゃしません。なにより、当時は、一般人が新聞を読む習慣が無かったため、読者獲得できず、販売部数も伸びずで結局、密先生肝煎りの「ひらがなしんぶん」は、わずか1年で廃刊になったといえます。密先生、今でいうところの消費者ニーズとマーケティング調査がうまくいかなかったためか「あきゃきゃ…」となるころですが、そんげことで挫折するような先生ではありません。その後心機一転・方向転換。越後人の粘り強さで『郵便制度』の研究に着手、今の「郵便」「切手」の名称を編み出し（もちろん漢字で）、郵便事業を創設、「越後生まれの郵便の父」と呼ばれるまでになったのでした。

通信機器やらAIで、面倒な漢字も機械が変換してくれるし、長い文章も瞬時にやりとりできる現代を目にしたら、密先生はさぞやたまげなさることでしょう。ところで、もし「漢字廃止」があの時まかり通っていたならば、これまたおおごとになっていたな、と密かに思う私です。

※「まいにちひらがなしんぶん」は当時の一般的呼称で、発行名は『まいにちひらがな志んぶん志』です。年号や史実には諸説ありますが、当稿では『新潟県を築いた人びと』（旺文社）と関係機関への取材によるものです。

